

2015年11月19日／浪宏友ビジネス縁起観塾／法華経の現代の実践

事実を見誤る性質

1. 認知バイアス

現代の心理学の世界に「認知バイアス」という概念があります。

認知バイアスとは、ものごとを認識するときに、一定の方向に偏りが生じることです。このため、事実を見誤ることになります。この性質が、多くの人間に共通してみられるというのです。

「バイアス」とは、心理学では偏ることであり、「バイアスがかかる」といえば、認識を偏らせる力がはたらくというような意味です。

2. 認知バイアスの例

認知バイアスの研究が進んでいるようで、さまざまな認知バイアスが公表されています。

いくつかを、ご紹介します。

(1) 過剰確信バイアス

自分の判断や決定は正しいと思い込んでしまうことです。あらゆる情報が、自分の判断や決定が正しいことを支持していると思い込みます。

(2) 偽(ぎ)の合意効果

自分の考えや思いと同じ考えや思いを、他人も持っていると思い込むことです。他人が違う思いや考えを持っていると、お前は間違っていると怒りを発したりします。

(3) 確証バイアス

自分に都合のいい情報だけを集めて、自分の考えを補強します。

(4) 自己奉仕バイアス

成功は自分の手柄とし、失敗すると環境や他人のせいになります。

(5) あと知恵バイアス

物事が起きてから、自分はそうなると思っていたと考えたり、言ったりします。

(6) 正常性バイアス

災害や事件が発生し、被害が出ると予想されるときでも、自分は大丈夫、今回は大丈夫などと過小評価してしまいます。

(7) 現在志向バイアス

現在の利益を我慢すれば未来により多くの利益が得られると分かっているにもかかわらず、目の前の利益を選んでしまいます。また、現在の利益を得れば未来に大きな損失があると分かっているにもかかわらず、目の前の利益を選んでしまいます。

(8) フレーミング効果

同じ内容でも、説明のされ方によって、選び方が変わってしまうことがあります。

「この手術では100人中90人が成功します」と説明されるより、「この手術では100人中10人が亡くなります」と説明されるほうが怖くなります。

(9) ハロー効果

ある人の顕著な特徴に引きずられて、他の特徴についての評価が歪められることがあります。

例えば、スポーツに秀でている人に対して、人間的にもすぐれていると思ひ込んだり、有名タレントが登場する広告を見て、品物が良いと思ったりすることがあります。

(10) 社会的証明

みんながやっていることに影響されて、引きずられていくことがあります。

道が分からなくなったとき「みんながこっちに歩いている。こっちに歩けばいいんだろう」とついていくこともあります。

3. 認知バイアスへの対処

誰もが、知らず知らずのうちに認知バイアスに陥ってしまうようです。自分は認知バイアスなんかには罹らないなどと豪語するのは、すでに認知バイアスに罹っている症状です。

人間はどんな認知バイアスがかかるのかを学び、自分にも同じような認知バイアスがかかる可能性があることを受け入れ、自ら注意することで、認知バイアスの弊害から免れる可能性を増すことができます。

4. 認知バイアスの方向性

認知バイアスを検討すると、少なくとも次の二つの傾向があるように思われます。

(1) 環境に支配される認知バイアス。

起きている出来事の影響を受けて、認識に偏りが生じる認知バイアスです。

(2) 自分本位に認識しようとする認知バイアス。

起きているものごとを自分の都合に合わせて解釈しようとする認知バイアスです。これには、次のようなものがあります。

- ・自分を正当化する方向に、ものごとを認識してしまう。
- ・自分の方が上位にあるとみせつける方向に、ものごとを認識してしまう。
- ・自分の安全を確保する方向に、ものごとを認識してしまう。
- ・自分の都合に合う方向に、ものごとを認識してしまう。

5. 自分

(1) 本来の自分

私たちは、他の人々と関係しながら生きています。

私たちは、昨日、今日、明日と変化を続けています。

このように、関係・変化の中にあり、原因・条件・結果・影響の原理によって生かされている自分が「本来の自分」であると言えます。

(2) 主体性をもって生きる

主体性とは、自分の認識に基づいて、自分で思考し、自分で判断し、自分で意思決定して行動し、起きたものごとに対する責任を自分で担う姿勢です。

「あんたが、ああやったからこうなった」「あんたが、ああやらなかったからこうなった」などと、他人に責任を負わせて責めるのは主体性を失っているすがたであり、一種の自己奉仕バイアスであると言えます。

(3) 主体性に関する経文

釈迦牟尼世尊の教えによれば「本来の自分」は「主体性をもって生きる自分」です。そのことを説いた経文が数多くあります。

① 自洲・法洲

「アーナンダよ、だからして、自己を洲とし、自己を依拠として、他人を依拠とすることなく、法を洲とし、法を依拠として、他を依拠とすることなくして住するがよい」(増谷文雄編訳

『阿含経典3』ちくま学芸文庫、p. 368)

② 諸仏の教え

「すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、——これが諸仏の教えである」(中村 元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫、p. 36)

③ 自ら汚れ、自ら浄まる

「みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることはできない」(中村 元

訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫、p. 33)

④ 願生

「薬王、當に知るべし、是の人は自ら清浄の業報を捨てて、我が滅度の後に於て、衆生を愍むが故に悪世に生れて広く此の経を演ぶるなり」(『訓訳妙法蓮華経并開結』平樂寺書店出版／佼成出版社

発行／p. 203～204)

6. 自分を見誤る

(1) 自分に対する見誤り

人々の潜在意識には、自分に対する次のような見誤りが潜んでいると言われています。

- ・自分は変化することなく生き続ける
- ・自分は他と関係なく生き続ける
- ・自分のことは自分の思うようになる

これらの見誤りを「常一主宰」と呼んでいます。

こうした根本的な見誤りをしていることに本人は気づいていないのですが、現実には、自分の見かた、考えかた、行ない方に強い影響を与えています。

(2) 煩悩・随煩悩

こうした自分に対する見誤りから、ものごとを自分本位に見る性質が生まれています。仏教ではこうした性質を迷いと解釈し、煩悩・随煩悩と呼んでいます。

(3) 認知バイアスの原因

認知バイアスの多くが、自分本位に根ざしているように見えます。そこには自分に対する見誤りの影響があるように思われます。

7. 自己・自我・無我

(1) 自己・自我

本来の自分は「関係・変化しながら真理によって生かされている」のです。このような本来の自分を仏教では「自己」と表現することが多いようです。

これに対して「自分は一人で生きている、自分は変わることなく生き続ける、ものごとは自分の思い通りに動く」などと、思い違いしている自分を、仏教では「我」とか「自我」という言葉で表現することが多いようです。

(2) 無我

仏教における「無我」とは「我（自分）が無い」ことではありません。「自分に対する誤った認識が無い」ことを言っています。

「無我」の人は、自分を正しく認識しますから、ものごとも正しく認識することができます。これによって考えや思いを正しく巡らし、意思決定を正しく行ない、正しく行動することができます。